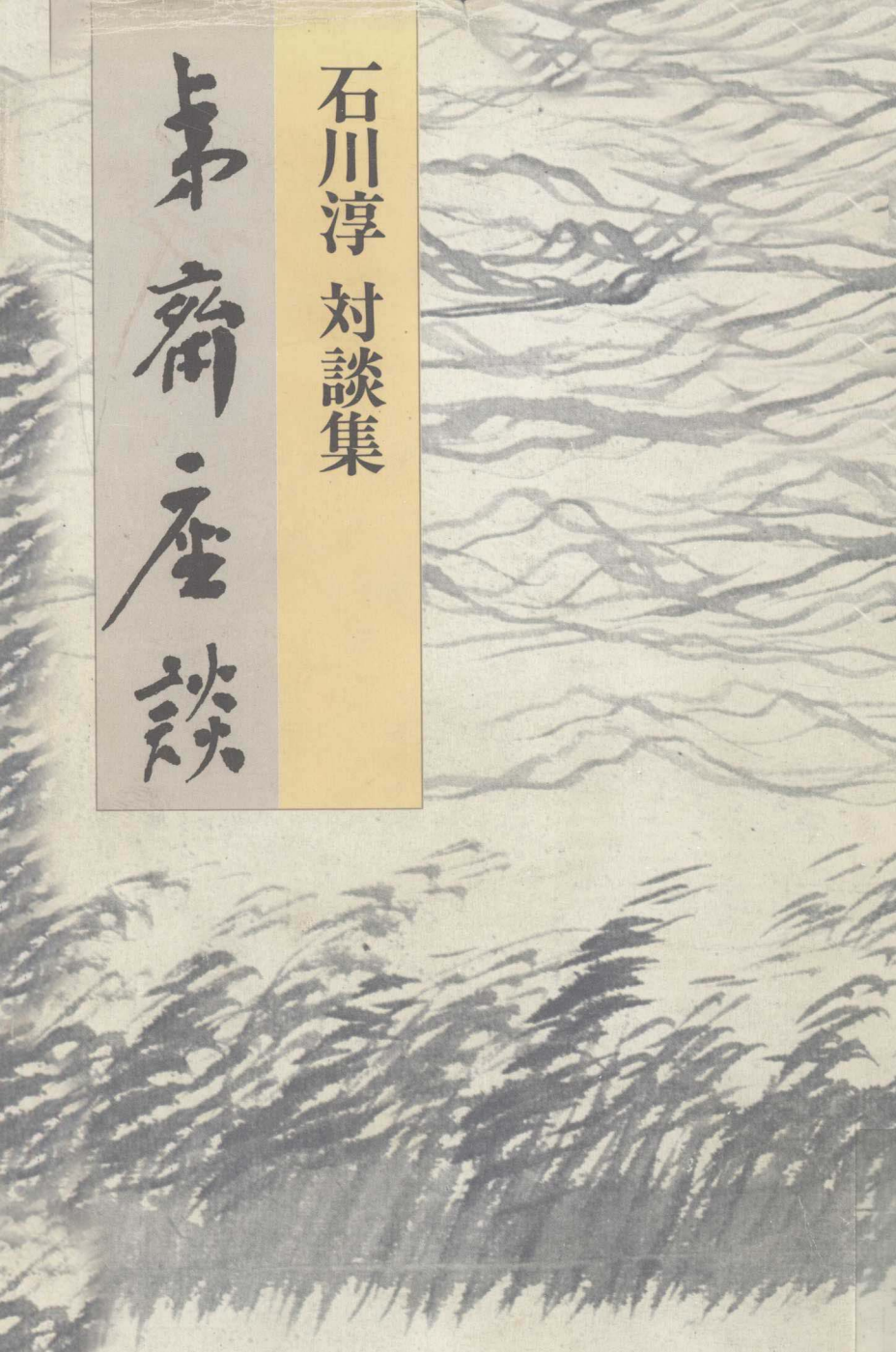


石川淳 対談集

糸斎座談



石川淳  
対談集

石川淳  
対談集

中央公論社

夷齋座談 石川淳対談集

昭和五十二年十月二十日初版発行  
昭和五十二年十二月二十日三版発行

著者代表 石川 淳

発行者 高梨 茂

印刷所 図書印刷

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ一  
振替東京二一三四

検印廃止 ©一九七七

夷齋座談

目錄

藝術・東と西 佐々木基一 武田泰淳 花田清輝 7

われわれはなぜ声明を出したか 川端康成 安部公房 三島由紀夫 33

石川淳の人と文学 安部公房 47

伝統と反撥 吉川幸次郎 中野重治 57

中国古典と小説 吉川幸次郎 89

『史記』の世界 貝塚茂樹 119

肉体の運動 精神の運動 三島由紀夫 131

徂徠とヒューマニティー 金谷治 151

“物のあはれ”について 中村幸彦 野口武彦 169

破裂のために集中する 三島由紀夫 181

無意識の選択 「文学的立場」同人 197

歴史・人間・藝術 萩原延寿 221

遊びの精神 佐々木基一 243

文学的雑談 丸谷才一 273

江戸と西洋 中村真一郎 297

言葉・文化・政治 安部公房 321

江戸期の文学 ドナルド・キーン 331

我鬼先生のこと 大岡信 349

歌仙の世界 安東次男 丸谷才一 大岡信 363

題 簽  
石 川  
淳

夷齋座談

石川淳対談集



藝術・東と西

石花武佐  
川田田々木  
清泰基  
淳輝淳一

「三文オペラ」の話  
永遠なるものへの憧れ

佐々木 石川さんは今まで、一対一の対談はおやりになったことがあるが、座談会というものに出られるのはこれが初めてだそうです。今日は、そういう石川淳さんの御厚意に甘えて、ひとつざっくばらんにいろんなことを放談して頂きたいと思います。……最近、石川さんも芝居を書かれたし、花田さんも書いているし、武田さんも芝居にタッチされているわけですけれども、この間見た「三文オペラ」の話からやったらどうでしょう。武田さんもこの間見られたんですね。

武田 ええ見ました。前に「三文オペラ」というのが日本に來たことがありますね。

石川 ええ活動だね。

武田 あれはだれだったんですか。

佐々木 パプストが演出です。

武田 ずいぶん昔でしょう。

佐々木 一九三一年ですね。

石川 あのほうがオリヴィエのよりよかったようですね。今度のも、千田君でないとできないでしょう、あれやるのは。

武田 そうですね。ああいうことをよく知っている人がいない。

石川 ちょっと普通の演出では手がつけられない。

佐々木 ぼくは非常に面白かった。

石川 面白かったよ。

佐々木 (武田氏に) あなたも感心していたんじゃないですか。

武田 ええ、これには色気があるんだ。色気といったってエロティシズムじゃないけれど、やはり芝居というのはああいうものが要なんだね。

石川 泥棒だの乞食のやる芝居ですからね、歌が是非うまくある必要はない。しかしまずいよりうまいにこしたことはないけれど、あの程度のまずさでしかたがないだろうな。

佐々木 だから、なんかいわゆる赤毛の翻訳劇を見ているというような感じじゃなくて。

石川 赤毛ばなれしていましたね。

佐々木 日本のものになっていましたね。一九二八年です。初演が。あの二十年代の終りのドイツとどうも今の日本と社会の雰囲気似ているところがありますね。なんかピタッとしているよ。

石川 あの芝居を見ると、千田君の演出でなくても、

「三文オペラ」という芝居全体が、いくらか説教臭がありますね。

武田 ありますね。

石川 あれがちょっとのみこめないところがあるけれど、つまりわかっているんだよ、のみこめているところ、わかっているところをもう一度聞かせようということをや

る。

武田 そうそう、それがだんだん溜っていくと、終りにいくと頭に残っているような気がしてね。

石川 あんなもの理屈聞かないでもわかっているんだから、どれだけ面白く見せるかということ。

花田 そうそう。

武田 結婚の場面面白かったね。理屈抜きで面白かった。「海賊ジュニーの歌」、あれがいいですね。海賊がやがて現われるであろうと言って、自分だけ助かって連れて行かれるんじゃないの。

石川 市原悦子のポリーはよかったね。

武田 それにメッキイというのが、すごく良かったところがよかったね。前のはメッキイが神秘的な、すごいところがあって、女が惚れるのが無理がないというところがはっきりしていた。今度のは女に惚れられるのか、惚れられないのかわからなかったでしょう。

石川 あまり泥棒じみていないですね。

武田 泥棒じみてもないし、豪傑じみてもない。

佐々木 花田さん、今度芝居を完成したんでしょう。

花田 ええ。

佐々木 やはり影山英子が主人公ですか。

花田 いや、ほんとの壮士芝居です。壮士ばかり出て、

主人公がいらないです。

佐々木 主人公いないの？ 群衆で。

花田 群衆でもない。

石川 いつです？ 発表は。

花田 来月です。

武田 なんか権力者が出て来るわけですか。

花田 いや、あまり固有名詞のないような。固有名詞は一人もないんです。ぼくは芝居の中で一種の俗謡、俗曲というか、そういうものを使いたいと思うけれど、「三

文オペラ」のような具合にいかんね。日本のとくに明治あたりやるとどうも。

石川 文句替えればいいでしょう。当時のはやり歌の文句を替歌でやれば。

花田 ええ、かしなんでしょうか、大体俗曲が、三味線音楽とか都々逸とかそういうものが多くって、かえって流行歌だとか軍歌のようなもののはうに洋楽の要素が入っているような感じで、だからああいう都々逸のようなものをうまくいかせればいいんだけれど、ちょっとぼくらは、なんかズレを感じますけれどね。

石川 都々逸というのは新劇の舞台ではちよつとね。

花田 セリフの中におり込んで使っちゃうみたいなの。

佐々木 都々逸を？

花田 うん。自由民権というのは都々逸が非常に盛なんです。それがずっと運動の激化していく過程で、替歌が出て来る。非常に猛烈な天皇制批判であつたりするところがあるけれど、ほとんど残っていない。

石川 文句は作れるんじゃないですか。

花田 そうですね。作れるわけですけども。

武田 うまいじゃないか、あんだ、作るのは。

花田 べつに得意にするところでもないけれども。

武田 ほんとにあったかうそだかわからないようなのを（笑）。ありそうないような、人をたぶらかすのがうまいよ（笑）。石川さんのお芝居でも、歌をうたっている女の人が出て来ますね。一篇の作品の中でどこかに美しいというか救いになるようなものを出してくる。「三文オペラ」でも、ポリーが優しいというイメージと完全にピタリするわけではないけれど、なんかそういう要素がないと、やりにくいということはあるんじゃないかな。ドラマというもののの中で、どんなドギツイものの中でもね。花田さんのようなものの中でも、松姫が出て来たんだらう。武田信虎の。

花田 ええ。

武田 なんかあの場合でも、松姫を出さないと具合が悪いというか、そういうところがある。そういう問題は、どういうのかな、いろいろな力のせめぎ合いとか、駆け引きがあつて、かしななかそこに、永遠なるものを出したいという気持がわれわれの中にあるのじゃないか。それが何なのか。それがないとひっかかりがつかないというものが、なんかあるんじゃないかな。

佐々木 それが、武田泰淳ふうのヴィジョンだね（笑）。一切無常という。

武田 しかしそれは発見だから、なかなかうまくもちこたえられないし、発見するというのは第一難しいよね。

石川 芝居の場合では、そういうものがあつたほうが、舞台効果があるんじゃないかという……

武田 たしかにそうですね。

花田 あるんですね。なんかうまくいかないし、てれちやうようなところがある。

佐々木 「三文オペラ」の「海賊ジェニーの歌」とか、「ソロモンの歌」とか、ああいうすごいザレ歌とか、虚無的な歌とか、やはりあれがあるから芝居全体に深味が出るわけ。

武田 ジェニーが二回裏切るでしょう。二回裏切ると、かえってジェニーがいい花みたいに見えて来たりするんだよね。ああいう効果というのは永遠に続くだろうね。

佐々木 やはりああいう歌がなければ、理屈っぽい教訓だけになって面白くない。

石川 理屈じゃつまらないね。

花田 「三文オペラ」はメルヘンみたいなものが流れている。そこがやはりね……

佐々木 石川さんの「おまへの敵はおまへだ」の中で、宙吊りで狂女が歌うということね。あれなんか読むと、

舞台でどうなるかと思ったけれど、あれ実際に舞台上で人間の声として出て来ると迫力があるね。効果があるんだ。

武田 何も言わなくてもいいわけなんだ、ほんとは。

花田 あの作品は、戯曲を読んだほうがむしろ面白かった。

石川 なんかほかの話をしましょう(笑)。

#### 仏教の話 歴史は繰返す

佐々木 ぼくはこの間黒沢明の「野良犬」というのを見ました。なかなか面白かった。感心したね。

花田 あれは見ました。

石川 わたくしは見ていない。

佐々木 御覧になっていないですか。あれは黒沢明の傑作だね。

花田 岸輝子というのはうまいですね。

佐々木 そうそう、とてもよかったね。なんかヤミ市とかマーケットが長々と出るものだから、戦後を思い出してね。しかしあのころのほうが混沌としたエネルギーがあつたような感じがしたな。

花田 そうかな。なんか明治のことを少し調べていたら、

二十年くらいまでは、これは抹殺されてしまうんじゃないかと思つてね。今度もあのコースを行けば、戦後なんて、十年か二十年か……

武田 抹殺されてしまうというのは？

花田 文学史でも、今の文学史だったら『当世書生氣質』とか、そんなのが初めにあって、それまでのものはあんまり評価されていないようだから。しかしほんとに面白いのは初めのほうだと思ふんだけどね。

石川 初めのほうというのは？

花田 つまり明治初年ですね。

石川 新聞がそろそろ出はじめているね。文学のほうでもあの時分はまだ、戯作者みたいなところが入っているから。

花田 だけれどもぼくは、その戯作者が面白いと思つた。

石川 面白くないという意味じゃないんですよ。しかし近代文学でないものがあるから……それを面白いということも言える。

佐々木 最近、勝本清一郎さんとか、柳田泉さんとか、掘り起しているでしょう。

花田 ですけれどもぼくはあまり感心しないんですけれどもね。柳田泉さんは、昔から多少小説をやっていたけれ

ど。すごい遺産がありますよ、初年は。やはり前代のものを受け継いでいるからでしょうね。

石川 江戸の庶民と直接にね。明治の初年、あの初年というのは、つまり元年から二十年までの間、坊主ではどういう人がどういうことをやっていたんでしょうね。

花田 坊主ね。

武田 初年というわけではないけれど、初めに一時神道が国教みたいになって、仏教が全部否定されたわけですね。浄土でも、本堂に神体を祀って変形したわけですよ。

それじゃいけないというので、坊主共が集まって「新仏教」というものが出され、堺利彦と連絡を取って半分社会主義的なことをやって、原始仏教へ還れということをやった。それが各宗派から出て来たんです。

佐々木 それは何年ごろですか。

武田 「新仏教」というのは、堺利彦たちが運動を始めたころだからだいたいぶあとだね。

石川 明治三十年。

佐々木 三十年代ですね。

武田 そのころ仏教が非常に栄えていたわけです。ところが幸徳事件で、この事件に各宗派が関係していた。禅宗も、真宗も関係していたんで申し訳ないといって、宮

内省に申し入れたわけだ。それでいっぺんに、仏教がインターナショナルでなくてナショナルな、国家に結びついたものになってしまつて、おとなしくなつたわけですよ。仏教を勉強したやつでも、ロシアまで見て来たでしょう。無政府主義のようなやつたちとつきあつていた連中もいる。それで、日本の仏教家はだらしないといつて攻撃していただけれども、その人たちも幸徳事件以後は国家主義的になつちやつて、最後には頭山満のほうへ結びついていったわけだ。

佐々木 そうですか。

石川 明治初年の神仏混淆と、仏教ぶちこわしの前がだいたいあるわけですね。

武田 ぶちこわしに対する妥協みたいな形で仏教は全部妥協妥協でいっていますから。

佐々木 キリスト教も弾圧されていますね。明治の初期にはだいたい殺されたりしていますね。

花田 同じことを繰返しているような感じがするね。明治二十年ごろね、それから昭和の初めごろと、今度、今だ。

佐々木 戦後だ(笑)。

石川 明治の三十年代に、つまり原始仏教に還れという

お話ね。原始仏教の研究は、そのころからやっていたんですか。

武田 まあ言語学、つまりサンスクリット、あれはどうしても向うへ遡らなければならないので、言語学ではやっていました。一般にはあんまりしていない。せいぜい支那仏教ですね。第一原典が読めませんから。

石川 サンスクリットの研究が、原始仏教へいくわけですか。

武田 そうです。

石川 おたくは？

武田 ぼくのところは浄土宗です。あのころ真宗と浄土宗から非常に進歩的なやつが出た。真宗は部落の中へ入っていたでしょう。ですから直接そういう運動にどうしてもタッチする。ところが面白いのは、牢屋へ入れられてからは禅宗のやつが頑張るんだ。死刑になつても、最後まで自分は正しいと。ところが真宗のやつは、運動したことが、おごり、たかぶりであつたというので全部転向しちゃう。あれは面白い。

石川 運動が傲慢であつたということですか。

花田 事実だけれどね。

石川 幾分傲慢だったとしても、手の打ち方が早すぎた。

武田 なんかも必然性があるんですね。理論的に、禪宗のやつは、生も死もおんなじだとか言って、幸徳秋水よりもっと頑張ったやつがいるんだ。

石川 傲慢といえ、禪宗の坊主ですね。

武田 そう。断言しちゃうからね。

石川 お釈迦様と自分はおんなじだと思っているから。

武田 そうです。

花田 時宗というのは力なかったんですね。

武田 遊行念仏のあれですね。今、藤沢に遊行寺がありますが、遊行念仏というのは、あれは口から出ていくたびに仏様が一つ一つ出ていくというんだ。だから遊行していく点では強かったらしいけれど、教団としてはどうかな。教団はやはり真宗の教団が一番うまくできているんじゃないの。株式会社みたいに。

佐々木 ああいうふうに教団の組織替えが行なわれるのは、明治のいつごろですか。

武田 真宗は最初に、皇族と関係をつけた。

石川 あれは教団としてはうまくやったですね。

武田 非常にうまい。頭がいい、宗教政治家として優秀なやつらが続出したらしいんです。しかしそれも、今や新興宗教に押されちゃっているからね。組織というのは、

どんどん新しくしないとね、かなわないんだよ。だから新日本文学会だって、組織をつねに新しくしないと組織がなくなっちゃうな。

花田 それは新しくなっているよ、つねにね。

武田 実際面白いな。宗教と組織とか文化と組織の関係というのは、とっても面白い。

花田 宣伝というののなかなかうまいよ。

武田 真宗はなぜ実力ができたかというと、本拠がなかったわけです。寺というのが実際になかったわけだ。最初是他宗の寺を借りていたんですね。それで説教して歩く、新しく信者を獲得して歩く以外道がなかったわけです。ところがそれ以前の宗派は本拠があるでしょう。そうすると安心しちゃうんですね。本拠がないとにかく自分の力で何十人何百人かき集めないと暮せない。そうなるって強いですよ。なんかよりどころがあると人間というのは怠けるよ。

石川 つまり檀家ね。それで信者なり檀家をつかまえるということはどううまくやったわけですね、真宗は。

武田 ええ非常にね。

石川 いつか大きな寺の坊主に会ったときに、うちの檀家は天皇家と徳川家だけだからちっとも金にならないと